

● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ● ●

培風館.

- この書は、先に「情報処理」Vol.44 No.12（2003年12月）書評欄で紹介された「情報システムの実際」と同様、現在編纂中の「情報システムと情報技術事典」（編集委員長 浦昭二慶應義塾大学名誉教授）のために執筆された原稿の一部を、事典全体の発行に先立ち冊子として編集出版したものである。事典本体は完成すると4部構成になると言われており、この書は第1部「情報社会と情報システム」の内容をまとめたものである。

1. 人間の情報行動（第 1 分冊）
2. 情報システムとしての社会（第 1 分冊）
3. 情報社会の基盤（第 1 分冊）
4. 情報化の影響（第 1 分冊）
5. 情報システムの基本概念（第 2 分冊）
6. 情報システムの企画・設計・開発・運用（第 3 分冊）

ついていくつか述べることにしたい

私自身は理工系の大学教育を受け、約 30 年間企業において情報システム構築に従事し、現在大学の経営情報学部で「コンピュータ概論」「経営情報論」「システム分析概論」の 3 つを講義している。講義では詳説しないが、言葉として言及する話題の中には、「ガバナンス」「NPO」「会計基準」「知的財産権」「プライバシー」「デジタルデバイド」(第 1 分冊)など情報技術以外のものも少なくない。これらがほぼもれなく取り上げられ解説されているのは非常に参考になる。また情報技術に直接関連する分野でも、言葉として混同されがちな「情報」「情報検索」「データベース」「情報管理」「情報システム」(第 2 分冊)などの概念が分別解説され、「ソフトウェアライフサイクル」「システムライフサイクル」(第 3 分冊)など構築プロセスに関する話題が、ISO などとの関連で整理されているのは、自分の知識の体系化に大いに役立つものである。

個々の概念は約 5 ページの短さの中で、ハウツーものとは違い、学術研究・標準・制度などの背景も含め“定説”として解説され好感が持てた。“事典を引く”ように個々の概念・用語を調べるのにも役立つが、通読すると概念間の関連も分かり、全体を展望した感じになるところがよい。その意味で非常に勉強になったが、さらに突っ込んで調べたいと思っても参考文献が記されていないのは不便な気がした（逆にその結果堅苦しさはなくなっている良さもあるが）。

今後この書が抱える大きな問題として、「情報システムの実際」同様、どこまで最新の事情が織り込めるかという問題があろう。しかし、まずは、情報を情報技術・人間・社会の統合的な視点から捉え、扱いやすい1つの書物のかたちでまとめられたことを喜ぶとともに、今後もこの種の企てが続くことを期待したい。

(松谷泰行／多摩大学教授)

